

選者 川口孤舟

投句・選句

今井紀久男 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 熊谷くにお 小早健介
 後藤とみ子 在間千恵 佐藤ただしげ 朱牟田恵洲 高橋康敏
 田島正己(新人・選句表記「己」) 土谷堂哉 豊田ゆたか 中川雅夫
 西澤國護 長谷見びん 福島正明 古川百合子 古田昇 星田啓子
 山崎亜也 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄
 伊賀山そらお 梅崎くすを 重枝孝岳 庄司龍平 高橋清子 橋口隆
 山本三恵

選句のみ

【互選句】 ○は選者の特選 ◎は孤舟選者の選

十七点 ◎物差に妻の旧姓十三夜

康敏

(紀・〇くす・孤・く・と・〇恵・清・堂・
〇び・正・百・規・亜・け・三・天・盛)

十点 ◎いさかいて無言の二人虫時雨

けい子

(そ・紀・くす・孤・く・び・允・百・
〇啓・〇盛)

八点 幾代経て開拓村は葛の城

びん

(そ・くす・健・五・清・己・百・け)

七点 語りかけ遺影を拭く日秋彼岸

忠彦

(紀・た・堂・國・允・隆・び)

藍甕に息づく藍や星月夜

孤舟

(〇と・孝・恵・〇康・雅・允・啓)

透きとおる児らの歓声天たかし

百合子

(く・た・孝・清・康・國・允)

六点 駄菓子屋は確かこの辺いわし雲

とみ子

(くす・千・清・康・堂・天)

五点 船唄に秋の深まる最上川

孤舟

(く・た・康・〇允・天)

青瓢垂れてくびれの佳かりけり

全

(〇龍・正・百・け・三)

また一つ馬齢重ねし破れ芭蕉

健介

(そ・ゆ・び・昇・規)

◎訃報欄に友の名小さく秋灯下

恵洲

(紀・忠・孤・く・隆)

ゐのこづち剥がす無口な男かな

康敏

(と・正・百・〇昇・三)

秋晴れは水の底まで届き行く

國護

(忠・と・清・堂・け)

◎謙虚さは聡太の矜持秋気澄む

盛雄

(紀・孤・千・孝・ゆ)

四点

寺島のぶ歌舞伎座初出演

秋芝居女の一念空回り

紀久男

(くす・た・雅・隆)

秋澄めり石投げて水傷ましむ

孤舟

(忠・五・孝・け)

鯉跳んで釣瓶落しの蘆の瀧

くにお

(健・恵・啓・亜)

郁子盛らん父手びねりの皿浅黄

とみ子

(千・昇・啓・盛)

◎古里は忌に帰るのみ栗おこは

全

(紀・孤・恵・隆)

久に会う友らのジョーク温め酒

千恵

(紀・康・雅・盛)

アサギマダラ

長旅の仮の宿なる藤袴
初雪や染まりゆく富士小海線
隣室の秒針聞こゆ夜半の秋

堂哉 全 (五・雅・啓・亜)
百合子 (千・〇孝・恵・龍)

三点

挽ぎたての林檎ガブリとしてみたき
きつつきを聴く切株の指定席
戦火絶えぬ地球活火山うそ寒し
新涼の雲一つなき今朝の空
枯葉道老ひの身さびし杖友に
◎ 鰯雲追ひ土手帰る下校の子
来ぬ秋を愁ふ千草や羊蹄山
秋天に棟打つ音の吸はれゆき
◎ 秋日濃しテトラポッドの長堤に
胸迫るホームの縁日秋の風
◎ 雑草といふ草はなし草の花
どんぐりに取り囲まれた野の仏
年ごとに干柿くれし嫁逝けり

忠彦 (紀・ゆ・天)
孤舟 (健・昇・天)
健介 (と・〇堂・ゆ)
ただしげ (そ・國・允)
雅夫 (そ・忠・た)
昇 (孤・堂・規)
びん (健・己・昇)
全 (健・己・天)
全 (紀・清・啓)
全 (紀・孤・亜)
啓子 (〇紀・隆・〇正)
亜也 (紀・孤・雅)
けい子 (己・正・天)
天牛 (紀・千・び)

二点

虎狂(とらきち)から紅白饅頭十六夜に
秋桜が咲くころ嫁ぐ歌が好き
いつの間に似た墓が立ち天高し
◎ 秋深むこの演出は泣かせすぎ
老木の年輪正し秋愁
直島へ向ふ船より秋澄める
虫の夜目覚めは鳥の島泊り
長き夜や製氷音にピクリとす
日曜日無音の部屋の秋気かな
手荷物の空路に失せて昼の月
思い出す新酒と共に笑顔の父
岩風呂の周り彩る秋の花
葉を散らし高き空見よと庭歌う
秋はゆく唐三彩の森の道
建て替える国立劇場菊薫る
赤い羽根募る連呼に怯みけり
家中の窓開け浸る風は秋
絵のうさぎ月を見上げる大覚寺

紀久男 (ゆ・け)
忠彦 (と・亜)
五郎太 (忠・三)
全 (紀・孤)
全 (紀・百)
とみ子 (五・三)
全 (紀・くす)
千恵 (そ・恵)
全 (龍・盛)
康敏 (健・〇亜)
正己 (紀・國)
ゆたか (國・規)
雅夫 (孝・三)
びん (五・己)
正明 (紀・五)
昇 (健・忠)
啓子 (紀・規)
けい子 (康・己)

一点

妻のゴルフ土産客テーブルにからす瓜
台北で金婚祝ひ天高し
秋の夕プルスト読む友もいて
少しだけ稲架にかけたる米の味

紀久男 (盛)
忠彦 (紀)
五郎太 (正)
全 (紀)

百合子さん・・・時の流れを思いつつ、入植者の子孫はいま何処、なぜ土地を去ったのか等々、E文字から多くのことを連想しました。この開拓村はどこなのでしょう。

七点句 語りかけ遺影を拭く日秋彼岸

忠彦

ただしげさん・・・亡くなった人への愛情が感じられる。

堂哉さん・・・遺影を始め仏壇には埃がたまりますね！知らぬ間にウッスラ白くなっています。

隆さん・・・毎朝、毎夕、母の遺影に語りかけています。一緒に生きている気分です。死後また新たな関係が始まる。

藍甕に息づく藍や星月夜

孤舟

とみ子さん・・・息づく藍と星月夜が呼応しているようです。調べも美しいと思います。

恵洲さん・・・藍甕の本物を見たことがないが、息づくという感じがあるのだろうなあ、と想像力を刺激されて。

康敏さん・・・暗い土間に置かれた染物用の藍甕。藍汁の発酵が進んでいる。窓の外は満天の星。

透きとおる児らの歓声天たかし

百合子

ただしげさん・・・自分の身の回りでは、子供の歓声など聞くことが殆どないので、温かい気分になる。康敏さん・・・子供達の透き通った歓声が、透き通った秋の空に消えてゆく。爽快な句だ。

六点句 駄菓子屋は確かこの辺いわし雲

とみ子

康敏さん・・・子供時代の記憶を頼りに店のあった懐かしい場所を訪ねる。拙宅から一キロ以内に三軒あった駄菓子屋も、ここ十数年の間にみな閉店して仕舞った。

堂哉さん・・・久しぶりの故郷ですか？菓子屋のおばさんは随分前に亡くなったのでしょうか？

天牛さん・・・「たしかこの辺」が、やゝとぼけて面白いですね。

五点句 船唄に秋の深まる最上川

孤舟

ただしげさん・・・最上川の流れと船唄、深まりゆく秋の情景が目には浮かぶ。

康敏さん・・・船頭の歌う最上川船唄。ヨナ抜き音階には寂しさが伴い、深まる秋と調和する。

允章さん・・・最上川下りは本で読んだり、話に聞いたりしますが、一度も経験ありません。四季折々の良さはあると思いますが、秋は殊の外風情があるのでと想像します。

天牛さん・・・船頭さんが歌っているのでしょう。たまにはこういう経験をしてみたいですね。

青瓢垂れてくびれの佳かりけり

孤舟

龍平さん・・・括れは異なるもの。フォトや絵にもなり人を惹き付けますね

百合子さん・・・昔々、わが家でも夕顔を植えて瓢箪をいくつもならせました。形はほんとうに個性的で一つとして同じ形がない。その後の工程は辛抱あるのみ、水に浸けて中身を腐らせて少しづつ種を取り出してはまた浸けて、その過程の長かったこと・・・手元には完成品が二つ、残っています。

また一つ馬齢重ねし破れ芭蕉

健介

ゆたかさん・・・私も仲間です。

びんさん・・・台風一過の朝。大きな芭蕉樹の葉が裂けて剥がれてうな垂れて。万物の老いが目につく秋。

訃報欄に友の名小さく秋灯下

恵洲

孤舟選者・・・長い間交流の無かった旧友の訃報に驚き。

隆さん・・・友人を訃報欄に見つけるご縁の深さ。学生時代、帰省する直前にお世話になった方の

訃報欄に接した。声をかけられたような気がしたことが昨日のように思い出される。

ゐのこづち剥がす無口な男かな

康敏

百合子さん・・・様子を想像して思わずクスツと、さり気ないユーモア！
昇さん・・・中七の措辞には剥がせども一向に減らない無心さともどかしさが良く出ています。

饒舌な方の私でもこの時ばかりは確かに無口でした。

秋晴れは水の底まで届き行く

國護

とみ子さん・・・光が水底まで届いている様子が、良くわかります。
堂哉さん・・・中七が面白いと感じました。川でも池でも水溜まりでも良いのかな

謙虚さは聡太の矜持秋気澄む

盛雄

孤舟選者・・・藤井八冠は若くして人間も出来ている。
ゆたかさん・・・爽やかで素晴らしい青年ですね。

四点句

寺島しのぶ歌舞伎座初出演

秋芝居女の一念空回り

紀久男

ただしげさん・・・話題になっていたのでやんわりとした表現で面白い。
隆さん・・・歌舞伎というものは見物人が決めると云ったら大袈裟か。世襲なら総理の能力ありと似た誤謬。

※紀久男（自句自解）・・・山田洋次脚本・演出です。舞台上彼女一人が女の地声で浮いてしまっており
ます。親の七光りで出演出来てTV等でもはやされている感ありです。

秋澄めり石投げて水傷ましむ

孤舟

五郎太さん・・・泡が広がったのか、飛沫が上がったのか。「傷ましむ」という捉え方に感心しました。

鯉跳んで釣瓶落しの蘆の瀉

くにお

恵洲さん・・・瀉というのは海水かと思っていたが（鯉は淡水魚）、湖沼の意味もあると辞書にあつたので採ります。

亜也さん・・・巴水の版画にでもありそうな景。

郁子盛らん父手びねりの皿浅黄

とみ子

千恵さん・・・この綺麗な色の郁子を盛ろうとしたとき父作のあの浅黄色の皿しかない！と思いつかれ
たのでしようね。

盛雄さん・・・しみじみとした風情が伝わって来るベテランの佳句。

古里は忌に帰るのみ栗おこは

とみ子

孤舟選者・・・帰省は親族の冠婚葬祭の折だけになってしまった。

恵洲さん・・・古里と呼べる場所がない選者ですが、わかる気がします。

隆さん・・・俳句らしい俳句。栗おこわを目にして古里を思う。

久に会う友らのジョーク温め酒

千恵

康敏さん・・・コロナが五類になり、久しぶりに仲間が集まった。いささか年は取ったが、酒の上
で交わすジョークは健在だ。

盛雄さん・・・久し振りの同期会ででしょうか。少々の脱線発言も許される会の雰囲気伝わります。

アサギマダラ

長旅の仮の宿なる藤袴

堂哉

五郎太さん・・・この蝶は秋になると南下し、沖縄あたりまでいくそうです。おとなしげな七草、
藤袴が好きとか。花と同じようにこの蝶も万葉の時代からいたのでしょうか。

啓子さん・・・その途中藤袴に休む蝶。地味なこの花はこの蝶を呼び寄せるとか。自然界の不思議。

巫也さん・・・旅する蝶への着眼と藤袴を取合わせる巧みさ。

初雪や染まりゆく富士小海線

堂哉

ただしげさん・・・小海線の車窓からか、富士が夕日に染まりゆく様子が見て取れる。

正己さん・・・秋深まる中の小旅行。小海線から見える美しい紅葉が目に見えらるる感じられるとともに、中から見える富士山には初雪が降りはやくもしくろくなっている。同時に秋冬のコントラストを共有した色感あふれる力作

※孤舟選者・・・三段切れになるため 上五を「初雪に」とするなど工夫を。

※康敏さん・・・三段切れです。この句の上五に切字「や」は無用でしょう。

「初雪に染まりゆく富士小海線」

隣室の秒針聞こゆ夜半の秋

百合子

千恵さん・・・秋の夜長なかなか寝付けず秒針の動く音が気になって仕方ない時、ありますね。

孝岳さん・・・隣室の時計の秒針の音まで聞こえるのは、秋の夜更けの静けさの表現なのか、苦悩の為、夜中に目覚めてしまうのか。微妙です。

恵洲さん・・・今回選句対象になっている製氷機の句と同趣旨の句。隣室のかすかな秒針の音が聞こえるほど静かな秋の夜、ということですね。

三点句 挽きたての林檎ガブリとしてみたき

忠彦

ゆたかさん・・・私も林檎は好物です。

天牛さん・・・挽きたての林檎を喰えるなんて都会人にはなかなかないですよ。皆そう思うでしょう。

きつつきを聴く切株の指定席

孤舟

健介さん・・・静かな森の中でキツツキを聴く、至高の時ですね。それも独占指定席で！

羨ましい限りです。

天牛さん・・・今時啄木鳥のたたく音を聴けるとは、いい場所を見つけたものです。幸運です。

※康敏さん・・・季語は異なりますが、先行句があります。「囀りを聴く切株の自由席 本宮鼎三

戦火絶えぬ地球活火山うそ寒し

健介

堂哉さん・・・地球活火山は見事！どちらの争いも先が読めないだけに季語が良いですね！

ゆたかさん・・・一日も早く戦火が収まることを願っています。

枯葉道老ひの身さびし杖友に

雅夫

ただしげさん・・・老いの気持ちを上手に表現している。

鰯雲追ひ土手帰る下校の子

昇

孤舟選者・・・歩きつつも鰯雲の空を見上げ大志を抱く学童。因みに、追ひ↓追い、が良し。堂哉さん・・・懐かしい映画のワンシーンですね！子供たちの賑やかな声も聞こえています。

来ぬ秋を愁ふ千草や羊蹄山

びん

※孤舟選者・・・愁ふ千草や羊蹄山↓愁ふる千草羊蹄山 愁ふの活用に留意。

※びんさん（自句自解）・・・「来ぬ秋を」の季語は夏（角川）、「千草」は秋（角川）。句としての季語は秋としたい。北海道の羊蹄山はその端麗な姿より蝦夷富士と言われる。

秋天に棟打つ音の吸はれゆき

びん

啓子さん・・・新築躯体作業中か、大工さんの槌音が空気を突き抜けて透明な、あくまでも高い青空に吸い込まれていくよう。

秋日濃しテトラポッドの長堤に

びん

孤舟選者・・・並んだテトラポッドの隙間までは秋の日差しは届かない。

巫也さん・・・一見殺風景なテトラポッドに際立つ複雑な陰。

胸迫るホームの縁日秋の風

啓子

紀久男さん・リハビリ病院や老人ホームは敬老の日や文化の日など催事のある縁日は喜ばれております。クイズ、カラオケ、トランプ、将棋等みなさん満足して帰途につきます。

隆さん・老人だけの縁日に終末の悲哀を覚えたのかも。本人は楽しんでいるかも知れませんよ。正明さん・縁日が開ける人混みは駅のホームしかないと言う過疎地。参りました。

雑草といふ草はなし草の花

亜也

孤舟選者・「雑草」などと十把一絡げにしないでほしい。

※康敏さん・「雑草と云う草はない」は朝ドラ『らんまん』のモデル牧野富太郎博士の名言です。ネットで一寸探してみました。類句のオンパレードです。「雑草といふ草はなし姫女苑 古川充子」「雑草と言ふ草はなし犬ふぐり 川本一誠子」「雑草と言う草あらず仏の座 宇咲冬男」「雑草といふものはなし聖五月 佐々木国広」：

どんぐりに取り囲まれた野の仏

けい子

天牛さん・誰にも拾はれないで、団栗が降りたまっているとはなかなかつかからないでしょうに。

年ごとに干柿くれし嫁逝けり

天牛

千恵さん・自分より年下の人が先に旅立つのはつらいですし、ましてや手作り干し柿を毎年送ってくれた優しい嫁が先に旅立つとは。。。

二点句 虎狂(とらきち)から紅白饅頭十六夜に

紀久男

ゆたかさん・タイガースファンは強固ですね。リーグ優勝おめでとうございます。

※句会報編集時点で既に、阪神タイガースは日本一となりました。(編集子)

秋桜が咲くころ嫁ぐ歌が好き

忠彦

亜也さん・歌自体の情感に重ねてつい選んでしまいました。「好き」の素直さに誘われた気がします。

秋深むこの演出は泣かせすぎ

五郎太

孤舟選者・泣かせどころの多い演劇は演出家の腕。

老木の年輪正し秋愁

五郎太

百合子さん・私も高齢者という年齢になって、先人から聞いていた話が身に沁みています。

直島へ向ふ船より秋澄める

とみ子

五郎太さん・現代美術の島に向かう小さな船で感じた瀬戸内の秋、ちよつとギリシア風です。

長き夜や製氷音にピクリとす

千恵

恵洲さん・深夜独りでいると、冷蔵庫の製氷の音がやけに大きく聞こえてドキッとすることある、あるです。

手荷物の空路に失せて昼の月

康敏

健介さん・同じ経験あり、苦い思い出です。

亜也さん・トボけた中にある詩情。

葉を散らし高き空見よと庭歌う

雅夫

※孤舟選者・無季語になっています。併せて動詞が多いようです。俳句は動詞を少なく、名詞を多く詠うものとされています。

秋はゆく唐三彩の森の道

びん

五郎太さん・緑とか茶とか、ゆったりした色合いと秋は行くの組み合わせをいただきました。

建て替える国立劇場菊薫る

正明

五郎太さん・開場は1966年秋、私の社会人生活と重なります。もっぱら文楽に行きましたが、なくなった家内が日舞の会のアナウンスをしたり、図書室で調べ物をしたり、数多くの

句会では、出席者それぞれが持ち寄った日本酒3本、お菓子、つまみなどを賞味しつつ、窓外の秋晴れの空に皆さま一層元気を貰ったか、闊達で和気藹々とした時間となりました。いつものように五郎太さんの司会進行、夫々の選句についての披講、孤舟選者から、特に気になる動詞活用など留意点もいただきました。その後の皆さまへの選句お願いの結果はご覧の通りで、康敏さんが最高点12点。久し振りに15点を超える支持を得、けい子さん、びんさんがそれに続き高得点でした。

二、 来月十二月の句会は十四日、納会ともなります。世話人の紀久男さんは何とか出席をとお考えです。開始時間は午後一時、三軒茶屋の会場で昨年に引き続き、丸紅ご出身の社会人落語家の大滝氏をお迎えして一席語っていただくことに致しました。そのまま夕方四時半まで句会、その後場所を移動して五時から打ち上げ、忘年会と致します。句会には出席できないもの、忘年会にはお越しになる方も居られます。ご希望の関係者様方には、この機会には是非皆さまとの旧交を温めていただけましたら大変有難く存じます。

三、孤舟選者近詠5句

ひとつ家に表札ふたつ鯉幟 袋掛朝日もろとも包み込み
草笛を唇痛きまで吹きにけり 緑蔭に躑けよかりし盲導犬
舟ゆらり揺れて投網の宙に浮く

四、【関係者近詠】

虎伏して十八年や天高し 盛雄
・・・毎日新聞 十月十八日 若森京子選
【評】十八年ぶりにリーグ優勝を果たした阪神タイガースにオリックスもリーグ優勝し、関西はなんとなく盛り上がっている。「天高し」で作者の胸のすく思いが伝わってくる。

余生とは何時からのこと露時雨	盛雄	命ある今朝の実感秋澄めり	健介
山の端に牡鹿の鳴き生々し	全	便欠航宿を求めし夜寒かな	全
夜更けに読む芥川賞地虫鳴く	全	また一つ馬齢を重ねし破れ芭蕉	全
待つことの多し郵便ちちろ鳴く	全	リハビリの行きに帰りに赤とんぼ	紀久男
		猿翁逝き冥土の秋芝居札止めに	全
		六甲学院の太行進	全
		両手振り人文字見事な運動会	
		・・・きさらぎ句会 九月・・・	

呉線の停まれば停まる月の道 堂哉

令和五年十一月十一日

(了)